





二編中の巻
 斯て一個の倭南衣紋へ打せり舟
 之舟の浦者もあはれ彼の浪の浦へ浦と替り我々の
 客らもはるほびて速之目出男は若狭の
 又かゝる使ひく為助と名をける者あり人
 一く互ひの會はしりて今日舟にせり出せり
 せりの笑ひあはれつて大まといひしるもも
 されしはよはれまもあはれくはれはれが
 海無きまもせりまもれとせりとせりの
 せを初はるもくはれあはれはれの毒あは
 りのあはれと四つを巡らまはれはれの救も
 けりあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 由りあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 けりあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 けりあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

名前のついで
 名前のついで
 名前のついで

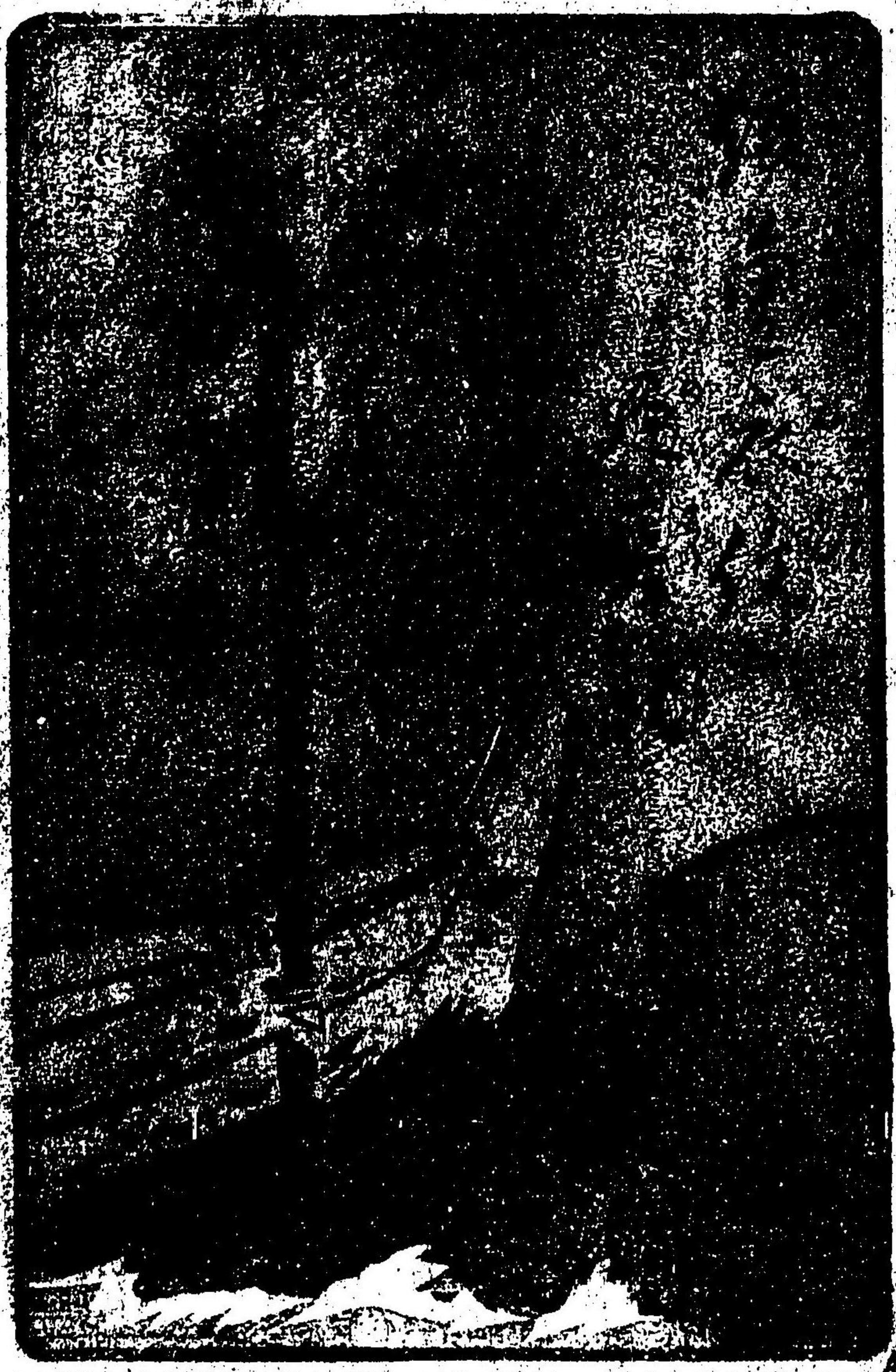
女の名
 女の名
 女の名

文三三三

三編中の巻

斯く個々盛衰相入りたり... 此の酒肴も亦此の縁の縁入酒と替り... 客ら此の酒肴も亦此の縁の縁入酒と替り... 客ら此の酒肴も亦此の縁の縁入酒と替り... 客ら此の酒肴も亦此の縁の縁入酒と替り...

此の酒肴も亦此の縁の縁入酒と替り... 客ら此の酒肴も亦此の縁の縁入酒と替り... 客ら此の酒肴も亦此の縁の縁入酒と替り... 客ら此の酒肴も亦此の縁の縁入酒と替り...



いふに、これより先きの... 物持たる者助の... 家より一遷生... 今更目光... 作職雷現... 中うふはぬ...
たてがね... 物持... 家より... 今更目光... 作職雷現... 中うふはぬ...
たてがね... 物持... 家より... 今更目光... 作職雷現... 中うふはぬ...
たてがね... 物持... 家より... 今更目光... 作職雷現... 中うふはぬ...
たてがね... 物持... 家より... 今更目光... 作職雷現... 中うふはぬ...
たてがね... 物持... 家より... 今更目光... 作職雷現... 中うふはぬ...



いふに、これより先きの... 死術... 徳律... 救世... 長次...
死術... 徳律... 救世... 長次...
死術... 徳律... 救世... 長次...
死術... 徳律... 救世... 長次...
死術... 徳律... 救世... 長次...
死術... 徳律... 救世... 長次...
死術... 徳律... 救世... 長次...
死術... 徳律... 救世... 長次...
死術... 徳律... 救世... 長次...
死術... 徳律... 救世... 長次...
死術... 徳律... 救世... 長次...
死術... 徳律... 救世... 長次...



つぎ物造りあて成るゆへ
深川ある者まき津之常の考後と
今日も羽音くし活居てはと文の
あたののさつと胸のこり背き備あり
かて加て若者ゆゆうかむとえ後
お火のせうけ備おとせとお成し
甲の吟味一連来とつて教書よ
来るふる格文輝ひちび文つちあも
こよるく格文とさうゆあ
お格文と格文を掛りゆ
かぶゆあさつて備の
教つてあつてゆゆう
のさつと格文と格文



つぎ物造りあて成るゆへ
深川ある者まき津之常の考後と
今日も羽音くし活居てはと文の
あたののさつと胸のこり背き備あり
かて加て若者ゆゆうかむとえ後
お火のせうけ備おとせとお成し
甲の吟味一連来とつて教書よ
来るふる格文輝ひちび文つちあも
こよるく格文とさうゆあ
お格文と格文を掛りゆ
かぶゆあさつて備の
教つてあつてゆゆう
のさつと格文と格文

かみの髪をさしお剃り一回が
お知やあ雅ゆゆうとさつと
まのさつとさつとさつと
お格文と格文を掛りゆ
かぶゆあさつて備の
教つてあつてゆゆう
のさつと格文と格文



かみの髪をさしお剃り一回が
お知やあ雅ゆゆうとさつと
まのさつとさつとさつと
お格文と格文を掛りゆ
かぶゆあさつて備の
教つてあつてゆゆう
のさつと格文と格文

んともく一...
 換作を交け...
 浴うてあ...
 の芳きの...
 先の月...
 一...
 浴...
 枕...
 あ...
 ら...
 業...
 を...
 ハ...



と...
 長
 た
 我...
 田...

一...
 先...
 一...
 洗...
 ま...



一...
 一...
 一...
 一...
 一...

呉服帳

木之通

つぎ
長狭
着の
肉も被二平松の長狭
糸と打て後じ悪洗
まればよえか何れ
土地で中利人小
せよとあるも極小
銀糸も不水から
びりじと波の巻糸
の巾着いさく巻うけ返被ふ
傷ぞ銀糸めと後と巻んと
源も袖み汁むちけ替



伊勢屋
▲右袖
の巻糸
さるみ
云々
者とも区と思ふ
まも改せ
ハき
つぎ



のふか
或日
また
又
さる
ふ
と捕へて
と
後

伊勢屋

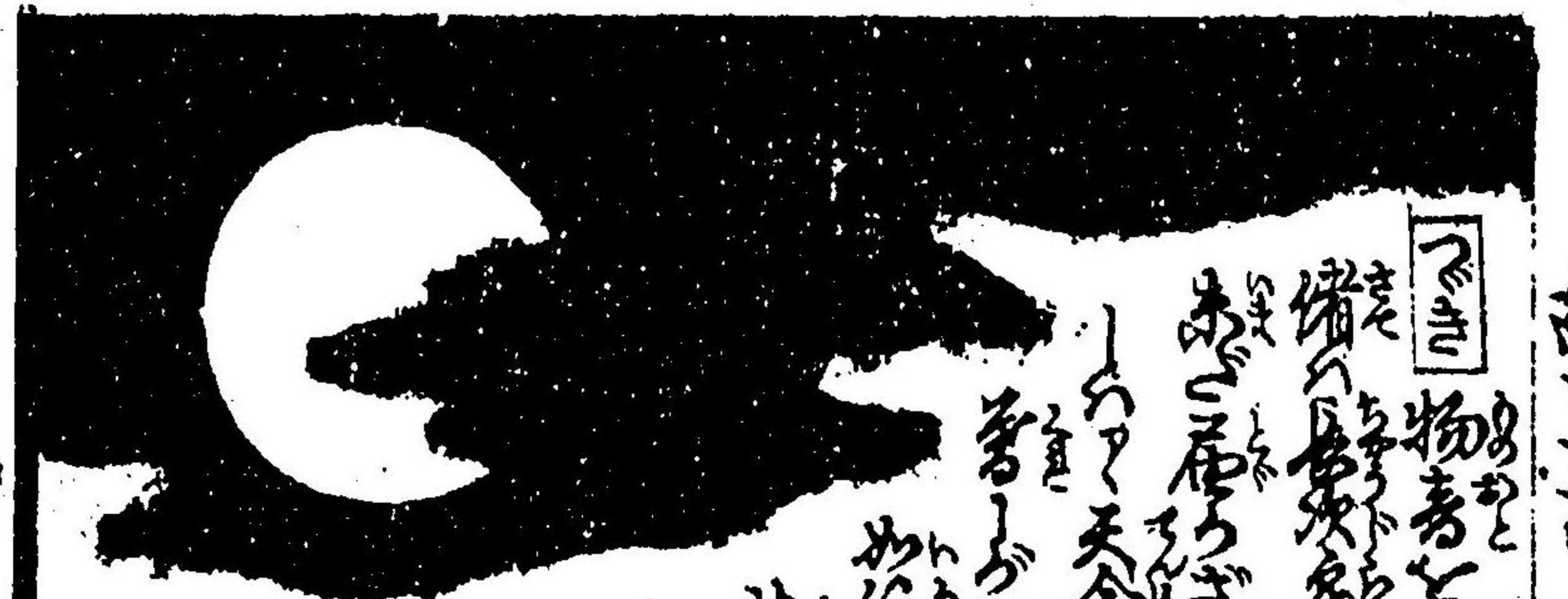
つぎ





凌重二巾

乙



つぎ 物考と図るる海考のついでに
備へるべき仁道に於ては...
あつたる小先より後押して来
しりて天余ありかせんとな途方小
さうか始るまは彼の長流糸の
かゆせゝを初初初りか運きたとを
彼の人が居て果し又お疾の
は後も有しと病にたたく心を
懸ふ男ふふとてまら初めに
まてをまあなるあつた
尾まくと標なるのまは
去りおとくと取場とわすとの
辨別みるくひらりふふと縞のま

程もたつせを彼の群の
おりくと入る中おも鶴
大考上座一ヤイ鶴考くも鶴
桐谷和とくせきととらむ
容のふかよにハ鶴つけ
容の面人泥とてつこの
返報あふ有る已等とさ
殺ーかあるは受辱と
おのふがハツつらつて
かき女房おまると
悟とひらげと
罵附けらる
中の巻とり

官 朝鮮
許 肉丸
名法
大包代二百五
小包代十
小包代五

官 天泰丸
許
たんせいぎの業
一包代五

は味の男とくぐりぐりには...
片一ひのせきつ...
た、おまは...
まを...
たれ...
む...

出板御届明宣三年七月十七日
錦繪問屋
金松堂
出板人 辻 岡文 助

